

## 知識のいま、むかし、これから

—加藤秀俊『メディアの展開』から考える—

松永智子

「むかし」と「いま」の連続性についてかんがえることは、わたしにとってかなり以前からの課題であった。とりわけ「徳川時代」なかば以後の日本と現在の日本とはきっちりつながっているのではないか、という仮説をわたしはずっともちつづけていた。

〔加藤秀俊『メディアの展開』中央公論新社、二〇一五年、ii頁〕

二〇一五年一月二〇日火曜日の午後、京都大学教育学部第一会議室において公開ワークショップ「加藤秀俊『メディアの展開』と京都大学の教育文化メディア

の研究」が開催された。メディア文化論研究室ゆかりの社会学者であり、コミュニケーション研究の泰斗である加藤秀俊先生を囲み、刊行されたばかりの大著『メディアの展開』をもとに討議する自由な研究会だ<sup>(1)</sup>。会場には、教育学部の学生をはじめ、年齢も生業も実に多様な加藤先生の「読者」約二〇人が集った<sup>(2)</sup>。

二〇〇九年には前著『メディアの発生』(中央公論新社)の合評会(於京都大学楽友会館)に加藤先生をお招きしているため、佐藤研究室主催のイベントとして今回は二度目の「囲む会」である。前回、進学したての大学院生として合評会運営の裏方を担当したご縁から、その後筆者は、加藤先生の取材に同行する好機

に恵まれた。やや大袈裟に言うならば、新著『メディアの展開』のご執筆過程をほんの一部垣間見たということになる。そうした経緯もあって、本ワークショップでは、教育社会学講座の稲垣恭子先生、竹内里欧先生とともに話題提供の機会を得、加藤先生との対話に交わる光栄に浴した。本稿では、『メディアの展開』と当日の議論を振り返り、メディア文化論研究室の活動報告としたい。

## 一 「わたし」からの発想

### (一)「むかし」と「いま」の連続性

ワークショップは、主催者である佐藤卓己先生のスピーチ「京都市大教育学研究科におけるメディア研究の学統」で始まった。教育学部で「コミュニケーション論」を担当された加藤先生、のち「広報論」を担当された津金澤聰廣先生による大衆文化研究のエッセンスが、佐藤先生とその門下生の業績にいかに関与継が

れているかについて、スライドを使ってご紹介された。佐藤先生のお話を聴きながら、私たちが「メディア論とはメディア史である」と教えられた研究室の源流には、加藤先生の研究スタイルがあることを直観した。社会の「いま」（現在）や「これから」（未来）を読み解く文法を歴史のなかに探ろうとするメディア史の態度が加藤先生以来の「学統」ならば、私もそこに連なりたいと改めて思った。

加藤先生の膨大な著作のなかでも、影絵・写し絵といった日本の視聴覚コミュニケーションの諸形態を、当時のニュー・メディア、テレビとの連続性において考察した画期的な文化論『見世物からテレビへ』（岩波新書、一九六五年初版）は、メディア史研究を志すものにとつて最重要文献の一つである<sup>③</sup>。文化は唐突に「誕生」するものではなく、連続的に「展開」するものだから、新しいメディアをめぐるコミュニケーションについて考察するに、欧米の研究をそのまま日本に当てはめるのでは不十分だ。すでに半世紀前、加藤

先生は次のようにはつきりと主張されている。

わたしは、日本の映像芸術を、映画にはじまりテレビに発展したという単純な文脈で考える通説に反対する。われわれの映像史は、もうちょっと長く、かつ複雑なのだ。

われわれは、映画以前に影絵・写し絵という動画芸術をもち、そういう素養のうえに映画文化、テレビ文化をつくっているのである。諸外国における映画やテレビと、日本のそれとは、文化史的には、まったく異なった意味をもつ。そのことをわたしは確認しておかなければならないと思う<sup>(4)</sup>。

日常を微視的に観察し、比較文化史的に捉える視点「〇〇の誕生」という断絶ではなく「□□から〇〇へ」という連続性を重視して歴史をみる感性の大切さは、私たちが院生時代、加藤先生から直接ご教授いただいたことでもあった<sup>(5)</sup>。

日本のコミュニケーションと文化の伝統のある部分は、その姿をかえながらも、放送文化のなかにうけつがれ、健在なのだ。わたしは、いっぽうの眼では過去のコミュニケーション史をふりかえりながら、他方の眼では、これからのコミュニケーション史を考えたい<sup>(6)</sup>。

「むかし」との連続性で「いま」を見つめ、「これから」を考えること。両眼使いの鍛錬が、メディア史の基本動作といえよう。

## (二) 実感としての「近代」

さて、私たちの生きる「いま」は、どれほどの「むかし」と連続的なのだろうか。それを「近代」という一つの連続体として捉えるなら、その起源はおおむね一八世紀（享保から天明）にあるだろう、というのが加藤先生の一貫した歴史認識である。瓦屋根の家に住

み、畳の上で暮らす。味噌や醤油で調理し、精米されたコメや寿司、羊羹を味わう。木綿を原料にした衣服や寝具をまとう、といった衣食住文化の基本はどれも、一八世紀の産物である。歌舞伎や寄席、三味線といった芸能も、三越、松屋、にんべん、鳩居堂といった江戸の「老舗」も、おしなべて「徳川時代」に由来する。メディアを切り口にみても、出版流通による「独学者」とサークル「連」の増加、学問と「格付け」の流行、交通インフラの整備による団体旅行の普及というように、江戸中期以降にはすでに、われわれと連続する「近代」が始まっているのではないかと。

この連続説は、史料から解き明かした「客観的事実」である前に、落語や講談に親しみ「江戸っこ」の末裔たる「東京っこ」<sup>6)</sup>として育たれた加藤先生ご自身の実感に基づくものだ。ここが重要である。<sup>7)</sup>『メディアの展開』は、「わたし」からの発想を基軸に編まれている。「同時代人」の書いた書物に学び、「先輩」たちの歩いた道を旅して、考え、書く。加藤スタイル

の真骨頂だ。朋誠堂喜三二（一七三五―一八一三）、狂言師名…手柄岡持）も大田南畝（一七四九―一八二三）も、加藤先生にとつて「おおむかし」の人ではない。「同時代の教養人」と付き合う距離感で、随時彼らに共感し理解を示しながら叙述されるスタイルは、「むかし」と「いま」の連続性に説得力を与えている。一人称を明確にし、狭義の歴史（*history*）ではなく生きた物語（*story*）として描かれるからこそ、読むものの知的好奇心を掻き立てるのだろう。<sup>8)</sup>

#### 『メディアの展開』目次

- 第一章 地域文化へのまなざし…『諸国風俗間状巻』再読
- 第二章 実証主義の時代…日本科学史序説
- 第三章 探検家の系譜…北方領土をめぐる
- 第四章 知識の整理学…百科事典雑話
- 第五章 叢書と図書館…『四書全書』から『群書類従』まで
- 第六章 メディア・ビジネスのあけぼの…出版業と貸本屋
- 第七章 江戸の「社交力」…自由な「連中」

第八章 文化としての公共事業…「旅行の時代」をかんがえる

第九章 学問の流行…ひろがる文字社会

第十章 隠者の手すさび…「隨筆」にあそぶ

第十一章 タウン・ガイドを読む…都市生態学の系譜

第十二章 「近代」文化史再考

むろん、一八世紀を「近代」の始まりとみなす歴史認識は、決して突飛なものでも、異端でもない。『メデアの展開』で参照されているように、京都帝大で原勝郎、内藤湖南らに日本史を学んだ西田直二郎（『日本文化史序説』一九三二年）は、「近代」（仏語で *Moderne*）とは、「定型」（*Mode*）つまり「吾人が住める現在と同一の生活様態」から派生した語であり、その意味で、江戸時代と現代生活とは連続して *Moderne* であると指摘した。ジョン・ホール、リチャード・ルビンジャーら英語圏の日本研究者たちも、「Tokugawa Times」を近代化の予兆が用意された時代「Early Modern」（初期近代）として論じていた。しか

し、戦前の皇国史観がマルクス主義歴史学に継承された戦後初期のアカデミズムでは、徳川時代を「封建暗黒」と見做し否定するのが「常識」であったのだ。

### （三）「他流試合」のすずめ

それから約半世紀。近年の経済史、文化史研究の潮流では、一八世紀を日本の近代の始まりとみなす歴史認識が多分に支持され、共有されつつある<sup>⑧</sup>。現に、二〇〇五年に教育学部に入學した私自身、教育史の講義で江戸・寛政期から現在に至る庶民識字教育の「連続性」を教えられた<sup>⑨</sup>。時代が加藤先生に追いついたといえよう。では先生はなぜ、「常識」に囚われず他に先駆けて「連続史観」を唱えられたのか、という問いを立てるならば、やはりそのご来歴に着目せざるを得ない<sup>⑩</sup>。アメリカ社会学にはじまり、今西錦司、梅棹忠夫、貝塚茂樹といった京大人文研の知識人たちと交流しながら、ハーバード、シカゴ、スタンフォードなどで海外のコミュニケーション研究者とも盛んに

議論されてきた<sup>(3)</sup>。いくつもの国際会議を主催な  
り、国際学会の創設、運営にも携わられた。海外調査  
にも随分出かけられている。フットワークの軽やかさ、  
ネットワークの幅広さが超一流だ。

『メディアの展開』「あとがき」のなかでは、マル  
クス史学から自由だった京大人文研の学風のなかで研  
究生活を堪能されたこと、アメリカ留学中に師事した  
D・リースマン『孤独な群衆』の翻訳によって人口変  
動と社会変容の連動という仮説を得たことの二点を、  
同書着想の背景として振り返られている(六一〇―六  
一一頁)。既存の学問体系に籠もることなく、「わたし  
という一人称でものを考え、人と語り、みずから歩  
いて世界を捉える。この姿勢こそが、射程の広い優れ  
た(関西弁で「おもしろい」)研究を世に送られてきた  
所以だろう。

ワークシヨップの終盤、加藤先生は私たちに向けて  
こんな言葉を残された。「自分で自分を小さくみつも  
るとロクなことはない。社会学、歴史学といった『専

門』で自分を縛るのはおよしなさい。『わたしは』と  
いう主語でものを考え、ものを書くこと。『メディア  
の展開』でも、江戸の大ベストセラー『経典余師』を  
記した「遊学派」の儒者・溪世尊(二七五四―一八三  
一)に触れながら、読者にこう説いておられる。

知的職業というのはことなつた経験をかさね、  
「他流試合」をくぐり抜けてみずからを鍛錬しな  
ければならない(四四二頁)。

まさに加藤先生が体現なさつてきた道である。同時  
に、佐藤研でも常々言われてきたことである。己の怠  
惰を反省しつつ、「他流試合」の精神は、しっかりと  
受け継ぎたいと思う。「学統」とは、ただそこにある  
ものではない。学恩を受けた、私たちの生き方が問わ  
れている。

## 二 社会調査の「伝統」を読む

### (一) フィールドワーカーの墓参り

『メディアの展開』は、江戸の豪商・津村涼庵（一七三六一—一八〇六）の紀行文『雪のふる道』をたどるところから始まる（第一章）。佐竹藩の御用商人として、天明八（一七八八）年の冬、江戸から秋田まで極寒の道を旅した涼庵。当時すでに五二歳、初老の身である。豪雪で危険に満ちた羽州街道を、彼はなぜ秋田へと急いだのか。「その異常な旅行の理由」をさぐるべく、加藤先生は旅に出る。『雪のふる道』を読んで、わたしもおなじ道を秋田まで旅してみよう、とおもった」（八頁）。二〇一〇年九月のことである。

涼庵は、江戸から奥州街道を北上して白河にいたり、そこから桑折（奥州街道と羽州街道の追分、福島県北東部の伊達郡）を経由して、羽州街道をたどっている。先生は、東京から白河を通り越し、東北新幹線で一気に白石蔵王まで出て、幸い羽州街道と重なっている国

道一一三号線、山形新幹線、JR奥羽本線を、ほぼ涼庵の歩み通りに進んでいく。この「雪のふる道」の取材旅行に、私は同行させていただいた。これが涼庵の往生した金山峠、あれが涼庵の仰いだ鳥海山と地図を開いて確認しながら、車と電車を何度も乗り継ぎ、秋田を目指す。涼庵が二〇日かけて旅した道を、たった一〇時間ほどでたどることができた。それでも、楽な旅ではなかった。

研究において「現地をみる」ことは、加藤先生がかねてから徹底されていることだ。実地をみない書物だけの学問は「ひがごと」である。そう「アカデミズム批判」を行なった本草学者・貝原益軒（一六三〇—一七一四）に先生が共感なさるのもよくわかる。

むかしから学者というものは、みずから実地を調査することなく、イイカゲンなことをいうものだ。そしてひとりが説をなすと、みんなが追従して、それを真理だとカンちがいする。本を頭から

信用するくらいなら、読まないほうがいい、というわけ。きわめて痛烈である（六六頁）。

涼庵の旅の理由という「なぞなぞ」に、無知な私は全く歯が立たなかったが、各地で生き生きと取材される先生のお仕事を拝見できたのは、極めて幸運なことだった。宿場の面影が残っている湯原では、車を降り、地元のオジイサン、オバアサンに話しかける。旧道の脇に振袖地蔵を見つけては、写真をとり、帳面に鉛筆を走らせる。東京の読書人から、村のフィールドワーカーへ。先生のモードが切り替わる気配のようなものを察し、感銘を受けた。私はそれまで、先生の書かれたものを読みこそはすれ、現地調査でのコミュニケーションに直に触れた経験などなかったからだ。百聞は一見に如かず。土地の人への話し方、観察事項の記録ぶりなどを拝見し、「読む人・書く人」ではなく、「歩く人・聞く人」としての先生の一面を実感することができた。私にとっては、とても重要なことだった。

なかでも鮮烈な印象として残っているのは、先生が秋田で、久保田藩の名士・人見蕉雨（一七六一—一八〇四）と、旅に生きた博物学者・菅江真澄（一七五四—一八二九）のお墓参りをされた場面である。こと真澄については、もうずいぶん前から秋田訪問の恒例行事になっているという。墓石の前で恭しく合掌される先生のお姿には、偉人を尊ぶような厳肅さより、師を慕うような親しみを感じた。実際に先生は、秋田の風物を観察し、綿密に記録した蕉雨や真澄の仕事をフィールドワーカーとして評価なさっており、彼らを「先行研究者」のような視点で捉えておられる。実感による「むかし」と「いま」の連続性、学問の「近代」がここにもあるのだ。

## （二）涼庵のフィールドノート

涼庵の話に戻ろう。彼が旅に出た理由。それは「寛政の改革」による財政危機にかかわるものではないか、というのが加藤先生の見立てだ。天明八（一七八八）



年、時の老中・松平定信は、全御用達商人に対し幕府からの「拝借金」全額返済の命を出している。このつびきならぬ状況において、淙庵は、貸した金を返してもらおうよう、久保田藩へと出向いたのではないか。決死の思いで秋田に到着したのもむなしく、混乱極まる藩で、淙庵はほとんど相手にされなかつたようだ。待たされるだけで、用務は一向に進まない。ヒマだ。

秋田に逗留した一年半ものあいだ、淙庵は歌を詠み、詩を吟じて、この土地で見聞したものを事細かに記録していた。紀行文『雪のふる道』の大半は、秋田での滞り見聞録になっている。稲わらでつくった子守カゴ「えじこ」や、秋田名物の「はたはた」、「かたくりの花」など、江戸っ子の淙庵にめずらしく映つたものは、すぐにスケッチし、解説を付けた。

淙庵は、儀礼食や祭りといった「無形文化」の記録にも余念がない。加藤先生は、これら「フィールドノート」の質の高さと、「好奇心にあふれた知識人」による先駆的な「民俗調査」の実態に感服なさるのだった。

た。

淙庵のこの記録をよんで、わたしははじめて「えじこ」の歴史のひとコマを知った。それほどにこれの観察眼と記録精神はあざやかなのであった（二四頁）。

『雪のふる道』を民俗史料として活用する歴史家は



津村正恭『雪のふる道』第四巻（国立国会図書館蔵）から抜粋

少なくとも、加藤先生は社会学者として、涇庵の観察記録に「社会調査」の原形を見出し、おられるのである。面白いのは、彼らの「フィールドノート」はのちに出版されたため、涇庵の記録が蕉雨に、蕉雨の知見が真澄へと、同時代の知識人に参照・継承されていることだ。知識の蓄積、流通がすすんでいた「近代」の事例として興味深い。

### (三) シカゴ学派以前

『メディアの展開』のなかで、先生はさまざまな「社会調査」の実践に着目されている。たとえば、最上徳内（二七五四―一八三六）の蝦夷探検記『蝦夷国風俗人情之沙汰』（二七九〇年）。徳内による蝦夷地の考察記録は、人類学者が自らフィールドに入って異文化を観察する「参与観察法」に類するものだという。屋代弘賢（二七五八―一八四二）が一八一三年ころから取り組んだ『諸国風俗問状答』は、諸藩に「質問票」を配って「アンケート調査」を実施し、収集した資料

を分類整理する「データベース」的発想があったと論じられている。

この画期的な『諸国風俗問状答』については柳田國男を中心とした民俗学も注目していた。ただし、柳田の編纂した『日本民俗学入門』（関敬吾との共編著、一九四三年）において、調査分類法の手本として参照されるのはホフマン・クライヤー監修の『スイス民俗学質問項目』であり、『諸国風俗問状答』は直接的には言及されない。しかし加藤先生は、屋代弘賢のプロジェクトはその手法において日本民俗学と連続しており、「近代」的情報システムの先駆だ、と高く評価しておられるのだ。

まだ続く。一八三二年に刊行された寺門静軒の『江戸繁昌記』は、冷酷な都市への批判精神に満ちた「タウン・ガイドの傑作」であり、「シカゴ学派の都市生態学 (urban sociology) に先立つこと一世紀、日本にこんな痛快な都市観察の系譜があった」（五五一頁）と刮目なさっている。静軒の著作は、明治に流行した

「繁昌」ものの出発点だ。服部誠一『東京新繁昌記』（初版一八七四年）など、明治に入ってから「東京案内」は、吉見俊哉『都市のドラマトウルギー』（一九八七年）をはじめとした都市論でも度々参照される。だが、静軒からの連続性が意識されることはほとんどないようだ。

日本の「都市社会学」(urban sociology)と、加藤先生の指摘する「徳川時代からの系譜」との間にはどうやら断絶があるらしい。民俗学、人類学、社会学などによる「社会調査」の歴史をしらべた佐藤健二によれば、日本の「都市社会学」は、自らの起源を問うこと、形成史を論じることにはほとんど興味を示してこなかった。シカゴ学派理論の紹介、実証研究の蓄積にくらべ、研究史を問う態度に欠け、「歴史から学ぶ」という態度を排除する傾向<sup>(12)</sup>さえもつたという。

自らの問題意識の前史として評価しうる素材との偶然の出会いが期待されず、先行する方法の発

掘と取り組む意欲も、生まれにくかったのである<sup>(13)</sup>。

佐藤が「歴史認識の不在」を問題とするのは、なんのための学問か、というレゾン・デートルにかかわるからである<sup>(14)</sup>。「社会調査」をめぐる「むかし」と「いま」の連続性を指摘した『メディアの展開』は、この問いに対する一つの応答とも読めるのではないだろうか<sup>(15)</sup>。第二章では、「比較科学」による「日本科学」について論じられている。

ここに「日本科学」という概念を導入することも可能であろう、とわたしはかんがえる。ちょうど「フランス文学」「ロシア文学」とならんで「日本文学」をとりあげ「比較文学」という領域が開拓されてきたのとおなじように、それぞれの「科学」が育ってきた社会文化的土壌をさぐることで「比較科学」を展望することもまた知識社会学の課題であろうかとおもうのである（九八頁）。

加藤先生によれば「日本科学」の特色は五つある。

まず、網羅的な博物学であること。相対主義をとり、法則定立的ではなく列挙的かつ分類学的であること。

「有用」「民用」に力点をおく実用主義、たということ。考察対象とする「自然」と観察者とが相互依存関係にあること。最後に、儒教を基礎とした高度な倫理性があること。以上から、「日本科学」では「形而上」の探求と「形而下」の知的なひとなみとのあいだに相克が発生することがなかった、と加藤先生は見ておられる。こうした「伝統」の再構築は、社会学のあり方に限らず、役に立つ／立たないの二項対立で議論されがちな学問や大学の展望に示唆を与えるだろう。

以前別の研究会にて、加藤先生は、『メディアの展開』に対する近世史家からの反応を期待したが、未だ応酬の機会がない、ということをおっしゃっていた。私はむしろ、佐藤健二氏をはじめ、「社会調査」に携わる社会学者や人類学者の反応を聞いてみたい、と思っっている。

### 三 メディア革新と「知の自由人」の交流

#### (一) 江戸のゲゼルシャフト的集団

『メディアの展開』では、江戸中期における出版事業の商業化、知識の流通量の増大といった「近代」の側面がミクロとマクロの視点で描かれている<sup>(9)</sup>。なかでも、知のインフラを基にした人びとの交流、ネットワークの有り様が興味深い。教養を媒介にした「社会関係」に、ワークシヨップ参加者の関心が集まった。比較文化史において、日本文化はしばしば「タテ」社会、「イエ」中心として説明されてきた。しかし、本当にそうなのだろうか。加藤先生は、少なくとも一八世紀の日本には、「ヨコ」のつながり、いわばゲゼルシャフト的な社会編成がすでに存在していたと指摘される(第七章)。「株仲間」然り、大田南畝(蜀山人)を中心とする狂歌の同人集団然り、である。特に狂歌の「連」は、血縁、地縁によるものではなく、自由な

個人がおたがいに知り合い、同好の士がつどう「結社の縁」であった。米山俊直いうところの「社縁」である。「社交」の場である。社会学用語なら「社会関係資本」(social capital)である。

「連」というグループに参加する歌人たちは、本名ではなく「ハンドルネーム」を使用し呼び合った。年齢階梯から解放された匿名的な社交空間が、そこにはあった。そして彼らは、身分とは関係なく作品の出来によって対等に評価され、「格付け」された。「出自」(ascription)ではなく「達成」(achievement)によって人を評価するシステムは、まさに「近代」の特徴である。「格付け」文化は、交通インフラの整備、出版流通の活性化といった情報ネットワークの拡大によって社会全体に普及していった。社会における情報量が著しく増大したのである。本から遊女まで、なんでも「格付け」された。「本についての本」、メタ・メディアの先駆さえみることができると。

現代のわれわれをとりまくネット社会では「ランキング」大流行で、流行歌のヒットチャートから書籍のベストセラーにいたるまで市場経済は「格付け」で機能しているが、べつだんおどろくにはあたらない。その原型はすでに一八世紀後半にちやんとできあがっていたのだ(三四四頁)。

江戸にはすでに、ゲゼルシャフト的社会関係が存在した、というのである。『江戸の読書会』(平凡社、二〇一二年)の著者、前田勉も同様の主張をしている。一般的に、知識人による自発的な学習結社の討論は、スピーチを「演説」、ディベートを「討論」と翻訳した福沢諭吉らが中心となった明治初期の明六社や三田の演説会から生まれたものだ、とされてきた。他方、それまでの儒学の学習方法は、先生から生徒への一方的な教授であり、固陋守旧の体制教学と決めつけられることが多かった。しかし、そうではない、と前田は強調する。江戸時代に、全国各地の藩校や私塾など

で広く行われていた「会読」は、あらかじめ決めておいた一冊のテキストを複数の参加者が討論しながら読み合う共同読書で、その集団は、階級に関係なく対等の立場で討議する民主的な形態をとった。それはハーバースのいう文芸的公共性にあたり、やがて明治の民権結社に展開していく。

西欧の法律学や経済学の書物呼んだり、政治的な演説や討論をしたりすることは、江戸時代以来の共同読書＝会読の場での経験抜きにしては考えられないだろう。むしろ、そうした経験・伝統があったからこそ、西欧の新しい学問や演説などのパフォーマンスを受け入れることができたのではないか<sup>(7)</sup>。

前田もまた、江戸時代からの「歴史の断絶」に疑問を抱き、「伝統」の再構築を問う論者である。現代でも、読書会は盛んだ。誰もそれが江戸時代以来の「伝

統」だと意識するまいが、ネットを介した読書グループも少なくない。今なぜ読書会が盛んなのかを考える、それらが、学校での勉強とは異なる自由な学問、道楽としての読書だからではないか、と前田はいう。実は、「会読」もまた「遊び」の学問であった。遊びとしての競争だからこそ、自らを笑うユーモアが育ち、異質な他者の意見を受け入れる寛容の精神も芽生える。こうした私的な関心の集まりによって、公的なテーマを討論する土壌が生まれるのではないか。前田は、思想としての「会読」再考の意義をそのように述べている<sup>(8)</sup>。「むかし」と「いま」の連続性、つまり「伝統」を見出すことは、知識や社会の「これから」を考えるヒントにつながるのである。

## (二) 独学をめぐる

ワークショップ後半の議論では、「独学」する知識人の「自由な交流」が中心テーマとなった。例えば、師弟関係。メディア革新と情報社会の進展により、人

びとは学校という制度に頼らずとも、独学で学問を積むことが環境としては可能となった。ただし、独りの読書では限界もあり、師や仲間との直接的なコミュニケーションによってこそ得られる「技」や「知」もあるのではないか。稲垣恭子先生の問いかけに、加藤先生は、学問における師弟関係の有効性を認めつつ、現代は弟子（学習者）の側に「師は選ぶもの」という意識が極端に希薄なのではないか、と新たな問題を提起された。

本来、なにかしらの学問を修めようとするものは、まず自ら付きたい師を選び、門を叩いて教えを乞うたところが現代、高等教育に進もうとするものの意識には、師に先んじて機関がある。「どんな先生がいるか、その人はどんな学問をやっているか」を知って大学に入るものは極めて少数派。もともと「学問をしよう」などという高い志をもって大学に入学する人文系の学生自体が絶滅危惧種であろうから、「師を選ぶ目を養え」との箴言が響くのは、現実的にはせいぜい大学院

生なのかもしれない。それとも、少子化時代を迎え、センター試験の撤廃や自己推薦入試枠の拡大といった一連の大学入試改革が進めば、師を選んで入学する学生は増えるのだろうか。見通しはそう、明るくない。入試とは、学生が師を選ぶのではなく、機関が学生を選抜する制度だからである。

竹内里欧先生が指摘されたように、I・イリイチの『脱学校の社会』（一九七七年）が日本語に翻訳されるより早く、『独学のすすめ』（一九七五年）を上梓されていた加藤先生は、率直にいつて、大学にはあまり期待しておられない。そもそも、学問とは道楽であるというスタンスで、自発的な個人が集う自由な討議空間にこそ、学問発展の可能性を見出されている。

そのモデルの一つは、一九八〇～九〇年代に盛んだったパソコン通信 *net* の「掲示板」だという。加藤先生ご自身、「ご隠居」さんというハンドルネームで「草の実」さんやら「土筆の子」さんといった「連中」と交流し、屋代弘賢の『諸国風俗問状答』よろしく、

「節分」「正月」などにまつわる知識を全国から収集し、データベース化を試みたこともあったそうだ。

「実に知的でたのしいとなみであった」という。ワークショップには、この「掲示板」メンバーから数名の参加者があった。なかには、「こ隠居」さんとはもう二〇年以上前からの「知り合い」だが、直接お目にかかるのは初めて、という珍しい方もいらして、会場が沸いた。体験知を重んじ、「実感主義」を提唱される加藤先生の「知行合一」を、私たちは目の当たりにした。

### (三) 中間文化のゆくえ

ネットを介したコミュニケーションは、アマチュアによる知の集積とも関連しよう。「専門知」に対する「集合知」への期待が高まる一方、ネット社会では、ポピュリズム政治やヘイトスピーチが問題化され、反知性主義（R・ホフスタッター）への懸念も高まっている。かつて「中間文化論」を世に問うた加藤先生は、

この状況をどうみられているのか。ワークショップ参加者は、先生に社会批評を求めた。

『メディアの展開』には、「荒くれ個人主義」という西部劇的美徳が政治思想の底流を流れているアメリカとは異なり、文字尊重の日本に反知性主義はみられなかったとある（四〇九頁）。日本で知識は常に尊敬の対象であり、「亜インテリ」も含めた「知識人」が尊崇されてきた。

実際に先生は、知識を尊重する傾向は変わっていないのではないかという見解をお示しになった。例えばテレビである。ワークショップの数日前、先生はたまたま点けたクイズ番組で、とあるお笑い芸人が高度な日本史の問題に次々と正解していくのをみて大いに感心されたという。とりたてて高級でもなければ、そうかといって下品でもない、大衆教養的な「中間文化」の事例であろう。社会に流通する知識は増大し、その裾野も広がっているのではないかと。

これに対し、テレビは情報弱者のセーフティネット



トである（『テレビ的教養』N T T出版、二〇〇八年）と論じられた佐藤卓己先生は、現代ではテレビさえ見ない層の知識格差が深刻だと指摘された。雑誌という「中間」的なメディアもかつてほど読まれなくなっている。すると加藤先生は、社会全体の知識（knowledge）は増えゆく一方、知性（intelligence）が失われているのではないかと付け加えられた。これを稲垣先生が「反知性主義」ならぬ「半知性主義」と返され、マスコミにおける大学教員の敬称問題などに話題が展開していった。ネット社会の知識と知性の問題は、掘り下げていくべきテーマであろう。二一世紀のIT業界では、人間の代替物としての人工知能（Artificial Intelligence）より、人間の知能を増幅させるIA（Intelligence Amplifier）が主要テーマとなっている<sup>(19)</sup>。機械と人間の関係を考えることも、知識社会学やメディア史の今日的課題である。

ワークショップの最後に、メディアと社会の未来について、先生のお考えを伺った。来るべき超高齢化社

会。研究するなら、メディアの未来より人体の未来の方が面白いだろう、というのが加藤先生の回答であった。高齢者は、文字を読んだり映像を観たりする目、音楽を聴いたり声を聞き取ったりする耳、人と話すための舌が、どんどん弱っていく。これらはすべて、コミュニケーションの基本的な感覚器官である。そこにコンタクトや補聴器などの機械が人体の一部として接続され機能していく。人間の知覚器官が今後ますます機械に代替されるとき、機械知に対する生命知は、どのように変容するのだろうか。参加者それぞれの胸の内に、様々な問いが浮かんできたことだろう。

知識と社会の「これから」を考える素材と視点を得て、加藤先生を囲む二度目のワークショップは終了した。足早に教育学部を去られた先生は、黄葉する東大路、紅く色づき始めた川端通を、京都駅に向け、まっすぐ南下されていた。

二〇一五年の暮れ、目白の永青文庫で『春画展』

(大英博物館出品)を観た。子宝祈願の「お守り」や「教科書」のほか、「片手でたのしむもの」であったという春画の流通は、江戸出版文化の隆盛ぶりを伝えてくれる。ガラスケースに入った二世紀前の「発禁本」を、芸術鑑賞なのか何なのか、好奇の目で見つめる閲覧者たち。その微妙な面持ちを見ながら、私は果たして、一八世紀の江戸を「近代」と実感するだけの文化的経験をもつだろうかと考えた。かなり、あやしい。

落語や講談の素養に乏しいし、狂歌を笑うセンスもない。書には多少の馴染みはあるが、連綿の文章を辞書なしで読むのは覚束ない。とうてい、益軒や安貞を「同時代人」とは思えない。「伝統」はどこかで廃れてしまったようだ<sup>(20)</sup>。悲しい哉、私は「伝統」から切り離された「ポストモダン」の人間なのかもしれない。

しかし、『メディアアの展開』を読み返すと、加藤先生の語りによって、江戸の知識人たちがとても身近に思えてくる。それぞれの活躍ぶりが生き生きと描かれ

ている。竹内里欧先生は、塙保己一(一七四六一—一八二二)論がお気に入りだ、とワークシヨップでおっしゃっていた。この盲目の国学者は、教科書的知識だと謹厳実直な聖人君子のごとくに教えられるが、実は、やむことのない知的好奇心に燃えながら陽気に生きたたのしい人物だったのでないかと先生は語る。

加藤先生は、江戸からの「伝統」とわたしを結んでくれる「メディアア」なのかもしれない。この「メディアア」は、「むかし」と「いま」のつながりを示してくれる。かりそめにいま、手元にある加藤秀俊『日本の視聴覚文化』(一九七二年)をみてみよう。「写真の問題」では、日本人の撮る写真が、アメリカ人のそれと比べてスナップ・シヨットののである、という。そしてこれは、俳句のイメージ性をより具象化したものではないか、と分析される。つまり、日本人の写真との付き合い方は、俳句という文芸的な伝統を背景にしている、というのである。

私はなるほど、と納得した。この原稿を執筆してい

る二〇一六年一月、暖冬といわれてきた日本列島全体が記録的な雪に包まれた日、ウェブやSNSには人びとの投稿写真であふれていた。それらはどれも、ただ「雪が降った」ということを率直に表現せんとするものに思えた。情景にたいする「驚き」を写真によって切り取る。かつてであれば、「一句詠む」だったのかもしれない。SNS上で、「いい写真」が評価されたり、反応として新しい写真が投稿されたりするのを見て、「連」や連句といった「伝統」を連想した。なんだかおもしろくなってきた。「はじめに」おもしろい「ありき」。「メディア」の声が聴こえるような気がする。

(1) 加藤先生がバイオニアとなられた教育学部のメディア・コミュニケーション研究とその系譜については、本年報収載の津金澤聰廣『京都大学教育学部におけるメディア史研究の系譜―開講科目についての覚え書き』を参照されたい。さらに、加藤先生と教育学部のつながりについては、中部大学(二〇一一年)『アリーナ 2011』(二二号、風媒社)の特集「加藤秀俊をめぐる環」に収められた津金澤聰廣「加藤秀俊先生に学んだ日々」、竹内洋「ひとつの加藤秀俊論」、佐藤卓己「『コミュニケーション史』の構想―加藤秀俊『文化とコミュニケーション』を再読する」、

足田正博「一九七〇年 加藤先生と私たち」にも詳しい。

(2) 当日の様子は、二〇一五年二月七日付『読売新聞』(大阪版、夕刊)「メディア論の泰斗今を江戸で斬る」でもレポートされている。

(3) 基礎文献として紹介される(例えば、見田宗介ほか編『社会学文献事典』弘文堂、足田正博「視覚文化の伝統―加藤秀俊『見世物からテレビへ』」井上俊・伊藤公雄編『ポピュラー文化(社会学・ベーシックス七)』世界思想社、二〇〇九年)だけでなく、最新のメディア研究(大久保遠「映像のアルケオロジー」青弓社、二〇一五年)でも再評価がすすみ、加藤先生へのオマージュ(飯田豊「テレビが見世物だったころ 初期テレビジョンの考古学」青弓社、二〇一六年)も刊行されている。

(4) 加藤秀俊『見世物からテレビへ』岩波文庫、一九六五年、三六頁。

(5) 中部大学における研究会では、一九六〇年から現代までの五〇年間社会と文化はどう変容したのかについて、各自が持ち寄った「□□から〇〇へ」(例えば、「マイ・カーからシェア・ハウスへ」)をもとに議論した。議事録は以下に収載されている。加藤秀俊、赤上裕幸、岩間優希、影浦順子、白戸健一郎、竹川慎吾、玉田敦子、長崎励朗、平井芽阿里、松永智子、「知のアリーナⅢ 時間と文化について―若い世代、加藤秀俊と語る」『アリーナ 2011』(風媒社、二〇一一年、七〇―一〇三頁)。

(6) 加藤(一九六五、前掲書、八頁)。

(7) 実感をもとにして自分の思想形成をしていく態度を、加藤先生は「戦後世代の特色」として期待した。(加藤秀俊「思想と実感」『日本読書新聞』一九五八年三月二四日号)。理論や抽象に傾倒する知識人への挑戦であり、加藤淳、大江健三郎らとの「実感論争」へと展開した。教育学部時代に加藤先生の講義を受講した経験もある教育社会学者の竹内洋は、加藤先生の研究思想を「日本人の実感主義に倣った加藤流日本型カルチュラル・スタディーズ」と称している。(竹内、前掲書、三六六頁)。

- (8) Lepore, Jill. 2012. *The Story of America: Essays on Origins*. New Jersey: Princeton University Press.
- (9) 荻部直「書評：加藤秀俊『メディアの展開 情報社会学からみた『近代』』、『東京人』一月号（通算三三四号）、都市出版、二〇一六年、二二四―二三五頁。
- (10) 辻本雅史「字びの復権 模倣と習熟」角川書店、一九九九年。
- (11) 加藤秀俊「わが師わが友―ある同時代史」中央公論社、一九八二年。
- (12) 佐藤健二『社会調査史のリテラシー』新曜社、二〇一一年、一九頁。
- (13) 佐藤、前掲書、二〇頁。
- (14) 佐藤、前掲書、一三五頁。
- (15) 松尾浩一郎（『日本において都市社会学はどう形成されてきたか』ミネルヴァ書房、二〇一五年、三頁）もまた、日本の社会学を概ね西洋からの輸入学問であったと認めながらも、「社会的関心を持った思考や調査の歴史を、それとは別の系統にさかのぼることも可能ではある」とし、江戸中期における荻生徂徠の経世論や福沢諭吉の文明論も社会学思想の源流として位置づけている。とくに福沢の西洋見聞体験は社会調査のマインドが色濃く、『西洋事情外篇』にはそれが顕著に表れていると指摘している。
- (16) さらに、それが西洋と同時並行で展開していったことも指摘されている。ピーター・バーク『知識の社会史』（新曜社、二〇〇四年、原著は Burke, Peter. 2000. *A Social History of Knowledge: From Gutenberg to Diderot*. Oxford: Polity Press）が「十七世紀以降の日本の印刷技術の発展、書店と読者の増大に着目し、『ちややら』の本の商業化は、西洋の動向に結びついて『影響されて』いたというよりも、むしろ『独立に』西洋の動向と並行して進んでいたようである」（二二六―二二七頁）と論じている。
- (17) 前田勉『江戸の読書』平凡社、二〇一二年、一五頁。
- (18) 前田、前掲書、二八七―二八九頁。
- (19) 西垣通『集合知とは何か』中公文庫、六九―七〇頁。
- (20) 春画に性的情操を得る感覚は、一九六〇年代を境に喪失したのではないかと、と井上章一（春画への接近をはげむもの）『ユリイカ』二〇一六年一月増刊号、二〇一五年、三〇―三二頁）は論じている。逆にいえば、一八世紀から二〇世紀中頃まで情操感覚は連続していたともいえる。感性の「断絶」期という一九六〇年代について改めて考える必要があるだろう。